

北海道の食鳥をめぐる情勢

令和5年（2023年）11月

北海道農政部生産振興局畜産振興課

I 本道食鳥の概況

1 ブロイラーの農業産出額

- 全国ブロイラーの産出額は、近年、消費者の低価格志向や根強い国産志向等により、鶏肉の家計消費量が年々増加するとともに、健康志向と簡便性を求める消費者ニーズに対応したむね肉の加工品（サラダチキン）等の需要が堅調であることから、平成25年以降、増加傾向で推移してきた。
- 令和3年は、依然として旺盛な鶏肉需要を背景に、ブロイラーの国内生産量が、過去最高を更新した前年よりさらに増加したことや、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による巣ごもり需要の増加から、もも肉、むね肉ともに価格が前年を上回ったことなどにより、対前年比4.2%増の3,740億円となっている。
- 本道の農業産出額は、令和3年で1兆3,108億円、うち畜産は7,652億円と58%を占めており、畜産部門では、全国（3兆4,048億円）の22%となっている。
このうちブロイラーの産出額は、令和3年は、対前年比2.7%増の153億円で、本道農業全体に占める割合は1.2%、畜産全体に占める割合は2.0%となっている。

2 我が国の畜産物消費の動向

(1) 畜産物の1人1年当たり供給数量

- 畜産物の供給量は、旺盛な需要に支えられ、近年、増加傾向で推移しており、令和4年度の1人1年当たりの供給数量は、牛乳乳製品で93.9kg、肉類で33.7kg、鶏卵で16.9kgとなっている。
- 肉類のうち、鶏肉は、近年増加傾向にあり、令和4年度で14.2kgと、肉類全体に占める割合は、42%となっている。

(2) 食肉消費の構成割合

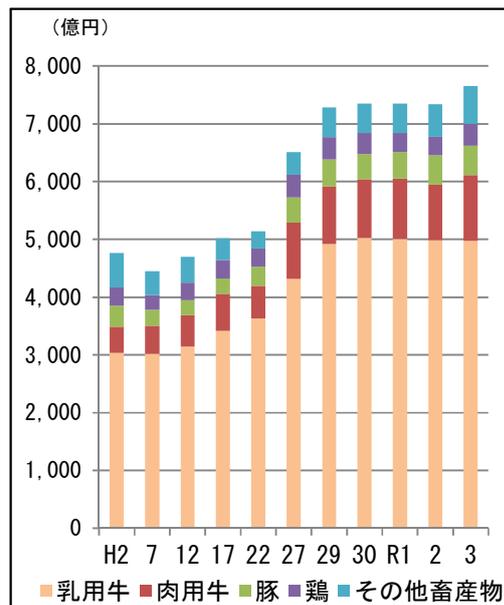
- 鶏肉の消費構成は、近年は、最大の仕向先である業務用・外食等が鶏肉全体の消費量の約5割、家計消費が約4割となっている。

表1 本道の農業産出額の推移

(単位：億円)

年次	農業	畜産						
		乳用牛	肉用牛	豚	鶏	鶏卵	ブロイラー	
H 2	11,175	4,765	3,039	451	362	313	215	77
7	11,143	4,450	3,018	486	276	256	162	94
12	10,551	4,699	3,145	538	264	300	184	98
17	10,663	5,018	3,415	646	263	315	197	104
22	9,946	5,139	3,634	559	336	313	186	123
27	11,852	6,512	4,317	972	433	399	212	159
29	12,762	7,279	4,919	1,002	459	390	217	172
30	12,593	7,347	5,026	1,016	439	357	188	167
R 1	12,558	7,350	5,006	1,049	455	327	179	141
2	12,667	7,337	4,983	960	512	322	172	149
3	13,108	7,652	4,976	1,131	512	383	229	153
構成比	100.0%	58.4%	38.0%	8.6%	3.9%	2.9%	1.7%	1.2%
全国 (R3)	88,384	34,048	9,222	8,232	6,360	9,364	5,470	3,740
構成比	100.0%	38.5%	10.4%	9.3%	7.2%	10.6%	6.2%	4.2%

<畜産の産出額の推移>



資料：農林水産省「生産農業所得統計」

注：平成7年のブロイラーの産出額は非公表のため、鶏から採卵鶏を差し引いた額を掲載。

表2 畜産物の1人1年当たり供給数量の推移

(単位：kg)

区分／年度	H2	7	12	17	22	27	30	R1	2	3	4	R4割合
牛乳・乳製品	83.2	91.2	94.2	91.8	86.4	91.1	95.7	95.5	94.4	94.4	93.9	-
肉類	26.0	28.5	28.8	28.5	29.1	30.7	33.5	33.5	33.5	34.0	33.7	100.0%
牛肉	5.5	7.5	7.6	5.6	5.9	5.8	6.5	6.5	6.5	6.2	6.2	18.4%
豚肉	10.3	10.3	10.6	12.1	11.7	12.2	12.9	12.8	12.9	13.2	13.1	38.9%
鶏肉	9.4	10.1	10.2	10.5	11.3	12.6	13.8	13.9	13.9	14.4	14.2	42.1%
鶏卵	16.1	17.2	17.0	16.6	16.5	16.9	17.5	17.6	17.2	17.2	16.9	-

資料：農林水産省「食料需給表」 (R4は概算値)

表3 食肉消費の構成割合の推移

(単位：%)

区分／年次	H2	7	12	17	22	27	29	30	R1	2	3	
牛肉	家計消費	53	47	41	40	38	35	35	34	33	37	36
	加工仕向	9	8	9	10	5	5	6	6	6	9	11
	業務用・外食等	38	45	50	50	57	60	59	60	61	54	53
豚肉	家計消費	45	45	46	46	52	55	54	56	55	60	58
	加工仕向	30	31	28	29	25	24	23	23	23	23	24
	業務用・外食等	25	24	26	25	23	21	23	21	22	17	18
鶏肉	家計消費	35	33	33	37	41	43	43	43	43	48	45
	加工仕向	8	11	9	8	7	7	10	6	8	7	7
	業務用・外食等	57	56	58	55	52	50	47	51	49	45	48
鶏卵の家計消費割合	57	53	52	51	52	52	52	52	53	57	55	

資料：農林水産省「食肉の消費構成割合」、「鶏卵需給等関係資料」、(独)農畜産振興機構推計

注：鶏卵については年度単位。また、直近年度の家計消費割合は概算値。

3 肉用若鶏（ブロイラー）の飼養動向

- 従来、寒冷地でのブロイラー生産は、コスト面で不利と言われていたが、昭和61年から62年にかけて、本州の生産企業が道内へ進出し、本格的な生産を開始した。
- 本道のブロイラーの飼養状況は、令和5年で、飼養戸数は8戸、飼養羽数は536万羽で、1戸当たりの飼養羽数は67.1万羽と、全国平均（6.7万羽）を大きく上回っており、大規模飼養が特徴となっている。
- 本道の出荷羽数は、令和5年で3,821万羽と、全国の出荷羽数の5.3%を占めており、1戸当たりの出荷羽数では478万羽と、近年400万羽前後で推移している。
- 我が国におけるブロイラー生産の主産県の状況は、令和5年の出荷羽数ベースで、鹿児島県が第1位、次いで宮崎県、岩手県、青森県と続き、北海道は第5位である。

4 肉用若鶏及び廃鶏の出荷動向

- 我が国の肉用若鶏の処理羽数は、近年増加傾向で推移していたが、令和4年で7億3,722万羽、生体重量では、前年比0.1%減の222万トンとほぼ横ばいとなっている。
- 本道の肉用若鶏の処理重量は、平成26年で10.1万トンと、全国の5.2%を占めている。（27年以降、都道府県別の数値は非公表）
- 我が国の廃鶏の処理羽数は、ほぼ横ばい傾向で推移していたが、令和4年で8,330万羽、生体重量では前年比5.1%増の14.4万トンとなっている。
- 本道の廃鶏の処理重量は、平成26年で0.6万トンと、全国の4.0%を占めている。（27年以降、都道府県別の数値は非公表）

表4 ブロイラーの飼養戸数、飼養羽数の推移

(単位:戸、千羽)

区分/年		H10	16	21	26	31	R3	4	5
北海道	飼養戸数	7	8	7	8	10	9	9	8
	飼養羽数	2,488	2,432	4,444	4,849	4,920	5,087	5,180	5,364
	出荷戸数	-	-	-	8	10	9	9	8
	出荷羽数	-	-	-	34,509	37,750	39,178	38,836	38,209
	全国シェア				5.3%	5.4%	5.5%	5.4%	5.3%
	1戸当たりの飼養羽数	355.4	304.0	634.7	606.1	492.0	565.2	575.6	670.5
	1戸当たりの出荷羽数	-	-	-	4,313.6	3,775.0	4,353.1	4,315.1	4,776.1
全国	飼養戸数	3,367	2,778	2,392	2,380	2,250	2,160	2,100	2,100
	飼養羽数	111,659	104,950	107,141	135,747	138,228	139,658	139,230	141,463
	出荷戸数	-	-	-	2,410	2,260	2,190	2,150	2,120
	出荷羽数	-	-	-	652,441	695,335	713,834	719,259	720,878
	1戸当たりの飼養羽数	33.2	37.8	44.8	57.0	61.4	64.7	66.3	67.4
	1戸当たりの出荷羽数	-	-	-	270.7	307.7	326.0	334.5	340.0

資料：農林水産省「畜産物流通統計」（～21年）、「畜産統計」（25年～）

注1：飼養戸数・羽数は、各年2月1日現在。令和2年については、センサス年のため調査未実施。

注2：平成26年以降の数値は、出荷羽数年間3,000羽未満の飼養者を除く。

注3：平成26年以降の出荷羽数は、前年2月2日から当該年の2月1日までに出荷した羽数。

表5 我が国のブロイラー生産主産県の状況(令和5年)

(単位:千羽、戸)

順位	都道府県名	出荷羽数	出荷戸数	1戸当たりの出荷羽数	順位	都道府県名	出荷羽数	出荷戸数	1戸当たりの出荷羽数
1	鹿児島県	159,080	390	407.9	6	熊本県	19,852	65	305.4
2	宮崎県	139,126	462	301.1	7	鳥取県	18,588	11	1,689.8
3	岩手県	110,047	308	357.3	8	佐賀県	17,863	62	288.1
4	青森県	39,856	61	653.4	9	岡山県	16,289	18	904.9
5	北海道	38,209	8	4,776.1	10	徳島県	14,999	134	111.9

資料：農林水産省「畜産統計」（令和5年2月1日）

注：出荷羽数は、令和4年2月2日から5年2月1日までに出荷した羽数。

表6 肉用若鶏及び廃鶏の処理羽数及び処理重量の推移(全国)

(単位:千羽、トン)

区分/年次		H10	16	21	26	R1	2	3	4
肉用若鶏	処理羽数	571,727	589,957	634,081	661,030	715,656	728,009	735,530	737,217
	生体重量	1,553,203	1,656,554	1,826,066	1,946,449	2,143,064	2,173,562	2,225,558	2,224,140
	前年比	97.0%	100.7%	102.2%	102.2%	102.9%	101.4%	102.4%	99.9%
廃鶏	出荷羽数	90,229	86,193	94,224	87,359	84,523	87,503	78,555	83,304
	生体重量	158,605	153,111	165,232	155,219	147,738	151,220	137,033	144,087
	前年比	-	94.0%	101.1%	105.6%	99.9%	102.4%	90.6%	105.1%

資料：農林水産省「畜産物流通統計」

注：平成27年以降は、年間処理羽数30万羽以上の食鳥処理場のみを対象とし、都道府県別は非公表。

Ⅱ 鶏肉の需給状況

1 鶏肉の消費動向

- 鶏肉の消費量は、消費者の低価格志向・健康志向の高まり等により、特にむね肉を使った商品開発が進んだこと等から、平成26年以降、概ね前年を上回って推移。
- 令和2年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、主に業務向けに仕向けられる輸入鶏肉の需要が減少し前年を下回ったが、3年は、中食需要の増加などにより、前年を上回り、前年比3.5%増の260万トンとなった。
- 令和4年も中食需要が堅調なことや外食需要が回復傾向にあることなどから前年比0.8%増の260万トンとなった。

2 鶏肉の生産動向

- 鶏肉の国内生産量は、消費者の健康志向の高まりや根強い国産志向を背景として、価格が堅調に推移していたことなどから、概ね前年を上回って推移しており、令和3年は、前年比0.6%増の168万トンとなっている。
- 消費量に対する国内生産量の割合（自給率）は、令和4年で64.3%となっている。

3 鶏肉の輸入動向

- 鶏肉の輸入量は、国内の在庫水準によって多少の増減はあるものの、近年、増加傾向で推移している。輸入鶏肉の大部分は加工や外食・中食向けに仕向けであり、ブラジル産が中心であるが、平成25年度から輸入が再開したタイ産については日本向けの規格に対応した処理を行っているなどから、輸入量に占める割合は平成30年度まで増加傾向で推移し、その後、安定して推移している。
- 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、外食需要が減退したことから、前年度を下回ったが、3年度は中食需要が増加し、前年度を上回った。
- 令和4年度は、前年度のブラジルからの輸入量が多かったこと及び米国での鳥インフルエンザの発生の影響で、米国からの輸入量が減少したことから、前年度比4.9%減の56.5万トンとなった。

4 鶏肉調整品の輸入動向

- 鶏肉調整品の輸入量は、タイ及び中国からの輸入でほぼ全量を占めており、近年、国内の外食・中食向け需要の増加や消費者の簡便志向等を背景に、増加傾向で推移している。
- 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により業務用需要が減退したことから、前年度を下回ったが、3年度は中食需要が増加していることから、前年度を上回った。
- 令和4年度は、上半期の輸入量が前年度より増加したことから、前年度比0.8%増の50万3千トンとなった。

表7 鶏肉の需給動向(全国)

(骨付き肉ベース、単位：千トン)

区分/年次	H12	17	22	27	R 1	2	3	4
消費量 ^a	1,865	1,919	2,087	2,298	2,537	2,513	2,601	2,618
対前年増減率	0.8%	6.3%	3.5%	3.2%	1.0%	-0.9%	3.5%	0.8%
生産量 ^b	1,195	1,293	1,417	1,517	1,632	1,653	1,678	1,683
対前年増減率	-1.3%	4.1%	0.3%	1.5%	2.1%	1.3%	1.5%	0.6%
輸入量	686	679	674	809	916	859	927	937
対前年増減率	5.5%	21.0%	21.9%	6.6%	0.2%	-6.2%	7.9%	1.1%
輸出货量	3	2	11	9	9	10	5	3
在庫増減	13	▲ 23	▲ 7	19	2	▲ 11	▲ 1	▲ 1
自給率 ^{b/a}	64.1%	67.4%	67.9%	66.0%	64.3%	65.8%	64.5%	64.3%

資料：農林水産省「食料需給表」、ALIC「需給表」、財務省「日本貿易統計」

※R4は概算値

注1：消費量は、「生産量+輸入量-輸出货量-在庫の増加量」により推計。

注2：輸入量は鶏肉調整品を含む。輸出货量の大宗はもみじ（鶏足）

(農林水産省「食肉鶏卵をめぐる情勢」より)

表8 食鳥肉の主要国別輸入量の動向

(実量ベース、単位：千トン)

年度/区分	①鶏肉輸入量合計						①+② 合計	鶏肉調整品輸入量合計				
			ブラジル	タイ	米国	②その他 家きん肉				タイ	中国	
	数量	対前年比	数量	数量	数量			数量	数量	対前年比	数量	数量
H22	431	125.7%	389	-	35	4	435	H22	387	123.6%	197	187
27	551	110.5%	426	96	23	6	557	27	410	100.8%	240	168
30	545	91.9%	395	131	17	8	553	30	519	104.3%	306	208
R1	572	105.0%	424	128	16	8	580	R1	506	97.5%	316	184
2	553	96.6%	405	133	12	7	560	2	468	92.3%	304	158
3	594	107.5%	440	135	16	7	601	3	499	106.8%	308	184
4	565	95.1%	412	140	11	7	572	4	503	100.8%	312	185
シェア	100.0%	-	72.9%	24.8%	1.9%	-	-	シェア	100.0%	-	62.0%	36.8%

資料：財務省「日本貿易統計」

注：鶏肉調整品の例：唐揚げ、焼き鳥、フライドチキン、チキンナゲット、サラダチキン

(農林水産省「食肉鶏卵をめぐる情勢」より)

Ⅲ ブロイラー養鶏経営の動向

- 令和3年のブロイラー養鶏経営における経営費は、雇人員、もと畜費、飼料費が増加したことから前年比12.4%増の1億3,257万円、一方農業粗収益は、前年比10.9%増の1億3,882万円で、農業所得は、前年比2.7%減の625万円となっている。

Ⅳ 鶏肉の価格動向

1 もも肉の卸売価格

- もも肉価格は、夏場の低需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。
- 平成15年1月以降、季節変動を伴いながら下降傾向で推移していた中、国内での高病原性鳥インフルエンザ発生（16年1月）以降さらに低水準でとなったが、その後は回復傾向で推移した。23年度の後半からは、東日本大震災後の輸入量の増加等により軟調に推移したが、25年度後半以降は、堅調な需要に支えられ、比較的高水準で推移した。
- 近年、生産拡大等を背景に、平成29年度後半からは前年を下回って推移したが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による「巣ごもり需要」の高まりから、量販店を中心に引き合いが強く、前年度を上回ったが、3年度は、夏以降「巣ごもり需要」に落ち着きがみられたことなどから、前年度を下回った。
- 令和4年度は、安定的な需要が継続していることや、飼料価格の上昇により前年度を上回って推移した。令和5年度も引き続き高値で推移している。

2 むね肉の卸売価格

- むね肉価格は、輸入品（業務・加工用）との競合により、近年、ほぼ一貫して低下傾向が続いてきたものの、15年度以降はタイ、中国産鶏肉等の輸入の一時停止措置もあって回復基調で推移した。21年度は軟調で推移していたが、22年度に入ってから前年を上回る水準で推移、23年度の後半からは、東日本大震災後の輸入量の増加等により軟調に推移したが、24年度の後半からは加工向け需要の伸び等から上昇傾向で推移した。
- 平成27年度の秋以降は、競合する輸入鶏肉の価格低下等により低下したが、29年2月以降は、旺盛な加工向け需要を背景に、堅調に推移していたものの、30年度以降は生産拡大が続いていることなどから、前年度を下回って推移した。
- 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による「巣ごもり需要」の高まりから、加工用及び量販店需要が好調で、前年度を上回って推移し、その後も堅調な需要が継続していることから、3年度も前年度を上回った。
- 令和4年度は、価格が高水準となっている輸入鶏肉の代替需要の増加や、飼料価格の上昇により前年度を上回って推移した。令和5年度も堅調な需要から引き続き高値で推移している。

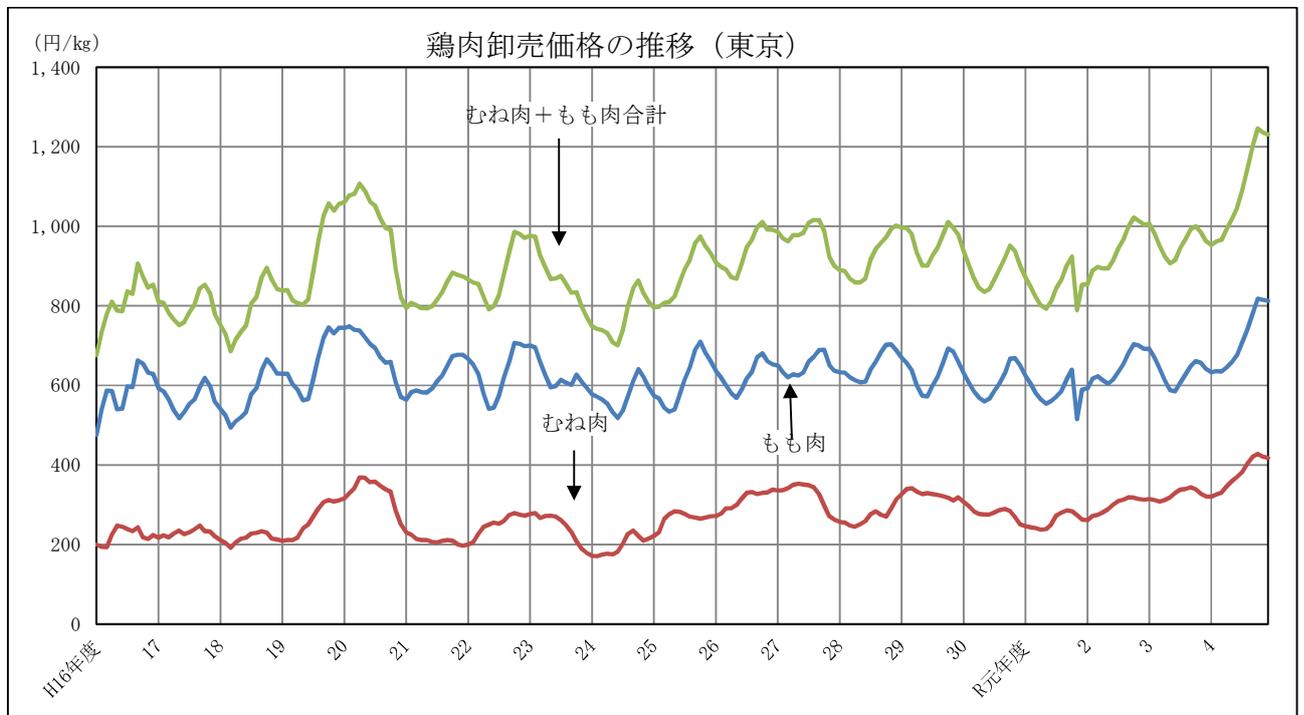
表9 ブロイラー養鶏経営の動向(全国、経営全体)

(単位:千円、羽)

年次	農業粗収益	経営費 〔雇人員 もと畜費〕 (農業雇用労賃 動物 飼料 その他)	農業所得	農業所得率	ブロイラー販売羽数	ブロイラー1万羽 当たり農業所得
H29	115,981	105,237 (2,125 17,144 65,912 20,056)	10,744	9.3%	241,810	444
30	120,654	107,054 (2,272 17,168 66,598 21,016)	13,600	11.3%	255,167	533
R1	143,966	124,640 (7,459 20,414 70,534 26,233)	19,326	13.4%	283,035	683
2	125,128	117,967 (7,609 18,701 66,325 25,332)	7,161	5.7%	261,309	274
3	138,818	132,566 (9,045 20,139 75,469 27,913)	6,252	4.5%	288,838	216
対前年比	110.9%	112.4% (118.9% 107.7% 113.8% 110.2%)	87.3%	78.7%	110.5%	79.0%

資料：農林水産省「農業経営統計調査(営農類型別経営統計〔畜産経営編〕)」

表10 国産鶏肉の価格動向(平成16年4月～令和5年3月)



[鶏肉の価格動向(東京・年度)]

区分/年度		H12	17	22	27	29	30	R1	2	3	4
卸売価格 円/kg (税抜き)	もも肉	620	568	632	649	636	611	593	644	636	713
	前年比(%)	102.8	96.8	102.4	103.7	97.8	96.1	97.1	108.6	98.8	112.1
	むね肉	200	229	250	327	327	282	260	297	325	377
	前年比(%)	87.3	102.7	118.5	105.1	121.6	86.2	92.2	114.2	109.4	116.0
	合計	923	894	984	1,080	1,061	989	950	1,050	1,060	1,090
小売価格 円/100g (税込み)	もも肉	116	123	130	136	136	134	130	129	130	137
	前年比(%)	99.6	100.1	101.6	100.7	100.0	98.5	97.0	99.2	100.8	105.4

資料：農林水産省「食鳥市況情報」、総務省「小売物価統計調査」

注：卸売価格の合計は、もも肉1kg卸売価格とむね肉1kg卸売価格の単純合計。